

一 貧者と窮者の対話。貧窮に関する問答ともいう。

892 風かぜに混まって雨あめの降ふる夜よ、その雨あめに混まって雪ゆきの降ふる夜よは、寒ふくて寒ふくて仕つか方かたがないので、堅かた塩しほをかじかじかたり糟な汁じゆをすすつたりして、しきりに咳せききこみ鼻はなをぐぐすず鳴ならし、ろくすつぽありもしないひけをかき撫なでては、おれほどの人物じんぶつは他ほかにあるまいと力ちからみ返かへつてみるけれど、それでも寒ふくてやりきれないので、麻あふとんをひひつかぶり、布ぬいの袖そで無なありつたけ着き重おもねるのだが、それでもやっぱり寒い夜よであるのに、自分おのれよりもっと貧ひしい人の父ちちや母ははは、さぞかしひもじく寒ふがつていることであろう。妻つまや子こは、きつと物をせがんで泣ないでいることであろう。こんな時にはどのようにしてそなたはこの世よをしのいでいくのか。

天地あめつちは広いというが、私わがのためには狭せまくなっているのか。日月にちげつは明るいというが、私わがのためには照あっては下くださらないのか。世よの人ひとみんながそうなのか、私わがだけがそうなのか。幸さいいにも人と生なれたのに、人ひと並ならにせつせと働はたらいているのに、棉わたもない布ぬいの袖そで無なの海うみ松まつのように破やぶれ下くだつたほろだけを肩かたにうちかけ、つぶれたような傾かたむいた家いえの中で、地ちべたに藁わらを解といて敷敷き、父ちちや母ははは上うへの方に、妻つまや子こは下したの方に、互あひいに身みを寄よせ合あって、愚おろ痴ちを言いつたりうめき合あつたりし、かまどには火ひの気きを吹ふき立たてることもできず、甑かまどには蜘蛛くもが巣すを懸かけて、飯いをたぐことなどとくに忘れてしまつて、とらつぐみが鳴なくようにひひひひいひひい鳴ないでいる、それなのに、格かく別べつに短みづかい物の端はしをさらに切り詰しめるという話はなし。

のように、袴はかまをかきす里さと長ながの声こゑは、寝ね床とこにまでやって来てわめき立てている。こんなにも辛くるくないものなのか。世よの中なかを生なきていくというこは。

憶おぼ良よし帰かへ京きやう後の第一だいいち声こゑ。天あま平へい四年しよんねん冬ふゆ頃ころの作つくか。筑つく前まへでの見み聞きにもとづいて創つくり出だされた貧ひ者と窮きゆう者しやとの問と答たを通として、俗よこ世よに生なきる人のすべなきを歌うたつたもの。

◇堅かた塩しほ 燻くわん製せいにした保たも存ぞん用ようの塩しほか。◇つづしろひ 少すくしずつ食たべる意いの「つづしろひ」の継つぎ統と態たい。以下以下継つぎ統と態たいが目め立たつ。◇しはぶかひ 咳せきをしつづける意い。◇びしびしに 鼻はな汁じゆを吸する音ね。◇麻あ衾きん 目めの粗こい麻あで作つくつた夜よ具ぐ。◇布ぬい肩かた衣い 「布ぬい」は麻あや紵こによる織オリ物ぶつで、「絹きゆう」より粗こ末すえな衣い料りやうとされた。◇飢う寒せむ寒せむゆ 「寒せむゆ」は下した二段にだん動どう詞し終しゆう止し形けい。凍こえる。◇わくらばに 他ほかと区く別べつされた状態じたいを示しす語ことば。とりわけ。◇わわわ 破やぶれて。◇かかふ ぼろざれ。◇伏ふ慮りよ 堅かた穴あな住す居いの掘ほ立た小屋こやか。◇曲まげ慮りよ 柱はしらの歪よこんだ小屋こやか。◇憂うれへ 哀あは願ねがひして嘆なげく意い。◇火ひ氣け 煙えんや湯ゆ氣け。◇甑かまど 米こめを蒸むす土つち製せいの器き。◇のどよひ 細こ々と悲かな鳴なを放はなつ意い。◇里さと長なが 農いん村むらの直ちよく接せつの管かん轉てん者しや。五十いそ戸とを里さととし、長なが一人ひとりを置おいた。◇呼よばひぬ 税ぜいを取り立てては呼よび立たてるのであろう。

893 この世よの中なかをいやな所ところ、身みも細こるような所ところと思おもひできません。私わがども人間にんげんは所ところ詮せん鳥とりではありませぬので。貧ひ者と窮きゆう者の問と答たに対して憶おぼ良よしの感かん想さうを述のべたもの。◇厭うしと恥ちしと 仏ぶつ教きやう語ご「厭うし」と 翻へん案あん語ご。◇鳥とり俗よこ世よ解かい脱だつのための知ち恵ゑを、仏ぶつ教きやうでは鳥とりに譬たとえてい

貧窮問答の歌一首并せて短歌

892 風かぜ交まり 雨あめ降ふる夜よの 雨あめ交まり 雪ゆき降ふる夜よは すべもなく

寒ふくしあれば 堅かた塩しほを とりつづしろひ 糟な湯ゆ酒さけ らちす

すろひて しはぶかひ 鼻はなびしびしに しかとあらぬ ひ

げ掻かき撫なでて 我わがれをおきて 人ひとはあらじと 誇ほろへど

寒ふくしあれば 麻あ衾きん 引ひき被かり 布ぬい肩かた衣い ありのことこ

と 着き襲そへども 寒ふき夜よすらを 我わがれよりも 貧ひしき人

の 父ちち母ははは 飢う寒せむ寒せむゆらむ 妻つま子こどもは 乞こふ乞こふ泣なくら

む この時は いかにしつつか 汝なが世よは渡わたる

天地あめつちは 広ひろしといへど 我わががためは 狭せまくやなりぬる 日

月つきは 明あしといへど 我わががためは 照ありやたまはぬ 人ひと皆

か 我わがのみやしかる わくらばに 人ひととはあるを 人ひと並

に 我わがれも作つくるを 綿わたもなき 布ぬい肩かた衣いの 海うみ松まつのごと わ

わけさがれる かかふのみ 肩かたにうち掛かけ 伏ふ慮りよの 曲まげ慮りよ

の内に 直ちよく土つちに 藁わら解とき敷敷きて 父ちち母ははは 枕まくらの方に 妻つま子

どもは 足あしの方に 囲かこみ居いて 憂うれへさまよひ かまどに

は 火ひ氣け吹ふき立たてず 甑かまどには 蜘蛛くもの巣すかきて 飯い炊ひく

ことも忘れて ぬえ鳥とりの のどよひ居いるに いとのきて

短みづかき物を 端はし切きると いへるがごとく しもと取る 里さと長

が声こゑは 寝ね屋や処とまで 来き立たち呼よばひぬ かくばかり すべ

なきものか 世よ間の道みち

893 世よ間まを 厭うしと恥ちしと 思おもへども 飛とび立たちかねつ 鳥とりに

しあらねば